

サッカーにおけるゴールキーパーの クロスボールに対する戦術構造

—— ゴールキーパーとディフェンダーとの関係について ——

檜 山 康

Tactics structure against cross balls of the goalkeeper in soccer

—— About the relations between goalkeeper and defender ——

HIYAMA Yasushi

1. はじめに

サッカーにおいて、攻撃側のクロスボールに対して、守備側がゴールキーパーだけで対処していくことは考えられない。そこには必ず、ディフェンダーによるプレーとゴールキーパー自身のプレーが存在する。例えば、ゴール前の状況はプレーヤーが密集していることが多く、クロスボールに対してゴールキーパーが直接プレーしたとしても、他のディフェンダーには、ゴールカバーなど状況に応じた様々なプレーを分担して行う必要がある。つまりゲームでは、ゴールキーパーも含めた多数のプレーヤーのプレーが同時に、適切に引き起こされてはじめてクロスボールを安全に処理できるということがいえる。ゴールキーパーとディフェンダーは、個々のプレーでクロスに対処するのではなく、1つの有機体としてのプレーが求められるのである。よって本稿では、有機体としてのゴールキーパー(以下GKとする)とディフェンダー(以下DFとする)の関係について、相互に行われるプレーから戦術的な原則を抽出し、その戦術構造について明確にする。

2. クロスボール処理におけるGKとDFとの関係

クロスボール処理において、守備側がより有利な状況を作るために考慮すべきGKとDFの関係に関する事項として、サポートエリア、GKが処理に出た場合のDFの役割、守備範囲の分担方法、コーチングの方法を考察の観点にする。

2.1. サポートエリア

サポートエリアとは、GKと最後尾のDFとの間のスペースを守備側から表現したスペースである²⁾。クロスボールに対する守備のポイントの一つは、サポートエリアをいかにGKやDFにとって有利なスペース(アドバンテージ・スペース^{5) 6)}にしておくかということである。具体的には、このスペースにクロスボールを送り込まれても、混乱なく守備側が先にボールに触り、GKによる補球、またはDFがクリアできる状態にされていることである。サポートエリアはボールやDFの位置によって変化する(図1~4)。一般的にボールがゴールラインに近づくほど、サポートエリアは縮小される。なぜならオフサイドラインの後退に伴って、DFも後退せざるを得ないからである。しかしサポートエリアの縮小は、GKの仕事を軽減するものではない。狭すぎるサポートエリアは、お互いの守備範囲の重なる部分が多くなり、役割分担が不明確になり、ボール処理に関して混乱する可能性がある。そのためGKのポジションは、可能な限りゴールラインに近づくことによってゴール前のスペースを広くとり、ボール処理に関する分担を行いやすくしておく必要がある。またGKは、混乱を未然に防ぐためにも明確なコーチングによってDFをリードしなければならない。ボールがゴール前に到達する時間はわずかであり、しかもDFがプレー行動を起こす前にコーチングを行う。GKの判断は、瞬間的であり、正確性を要求されるため、その責任はサポートエリアが縮小するほど増大するといえる。

逆にゴールラインからボールが離れるほどサポートエリアは広くなる。ボールがゴール前までに到達する時間は長くなるため、判断の時間もとれるようになる。また広くなることによってGKとDFの守備範囲の分担は行きやすくなるが、双方の守備範囲が及ばないスペースが生じる可能性があるため、GKはポジションをゴールラインから離れたものにするによって、サポートエリアを適度な広さにしておく必要がある。

2.2. GKが処理に出た場合のDFの役割

GKが直接ボールを処理するためにゴールから離れることは、他のDFにとっては、ボールを直接処理すること以外の役割を状況に応じて担うことを意味する。状況に応じて的確に役割分担をしていくことは、味方同志でボールを競り合うことや、逆に譲り合うような事態を回避する。またミスが発生した場合も、そのミスをカバーすることを可能にする。GKのクロスボール処理に関するDFの役割には、5種類あり、それぞれの役割はDFのポジションなどの条件によって使い分けられる。実際のゲームにおいては、複数のDFがそれぞれ異なる役割を同時性、連続性を持って行っていく。そのためGK自身の理解もさることながら、DFの状況に応じた理解とプレー行動は重要である。ここでは、ヒューズ²⁾の意見を参考にGKの処理ポイントからの位置の違いによるDFの役割を分類した。

(1) GKの処理ポイントに近いDFの役割

- a) GKがボールにアプローチするためのルートをあけること

GKがボールを捕りに出る場合、DFがGKのアプローチのルートに入ったまま移動しなかったため、交錯してしまうことがある。こうした事態を避けるために、DFはGKがボールを捕りに出る意思表示をした場合、ボールのコースを判断し、GKがボールに近づくためのアプローチのルートをあけなければならない。さらにアプローチのコースをあけながら、相手プレーヤーがルートに進入しないようガードする。そのため自分のマーカーや進入しようとしている相手プレーヤーを観察し、進入しようとしているコースに移動することが理想である(図5)。このようなプレーによりGKは、アプローチのためのルートを確保できるばかりでなく、安全にボールを補球できるであろう。しかし時間がない状況では、アプローチのルートから素早く移動し、ルートを確保することが優先される。

b) GKを相手プレーヤーのプレッシャーからガードすること

DFが相手プレーヤーをマークしている場合、そのプレーヤーによるGKのプレーへのプレッシャーが行われないう、GKをガードする必要がある。そのためには、GKのボールに対するプレーポイントと相手のポジションを結ぶ線上に入らなければならない(図6)。仮にこのポジションがとれなければ相手は簡単にGKにプレッシャーをかけることができるであろう。正確なポジションをとるためには、クロスボールが上げられた瞬間からボール、マークしている相手の位置及びGKの動きを観察しなければならない。しかしながらこの3点の観察は、ゲーム中同時に行うことは困難である。そのため、観察の視点は相手プレーヤーとGKの動きにおかれる。ガードを行うDFはGKの動きからどこでボールを処理するか予測し、ガードを行えるポジションをとる。マークしている相手の位置とGKの動きの正確な把握は、GKをガードするポジションを的確に決定するであろう。

c) GKのプレーをカバーすること

DFがマークしている相手プレーヤーを持っていない場合、GKのボールに対するプレーポイントのゴールサイドに移動し、GKのプレーをカバーする。基本的にはGKのプレーポイントから2~3m離れることによって、GKのミスによるこぼれ球をクリアできる可能性が高まる(図7A)。しかしカバーを意識し過ぎて、DFのポジションがGKのプレーポイントに近づいてしまうと、広い範囲をカバーすることは困難になりクリアできる可能性は低くなる(図7B)。逆に遠い場合、こぼれ球によってはクリアするまでに時間がかかってしまうことが考えられ、相手プレーヤーが先にボールを処理してしまう可能性が高くなる(図7C)。

(2) GKの処理ポイントから離れたDFの役割

a) クリアボールを拾うこと

クリアボールを拾うことは、GKのプレーポイントよりハーフライン側のDFの役割である(図8)。特に不完全なクリアを拾い確実に危険から脱することは、相手の2

次攻撃を防ぐ意味でも重要である。守備側のクリアを攻撃側が拾うことによって生じる2次攻撃は、非常に得点率が高いからである⁴⁾。それゆえDFは処理ポイントの位置と状態を素早く観察し、ボールがクリアされる方向を先取りすることによってポジションを修正する。ポジションを修正するための原則は、GKの処理ポイントとゴールラインを結ぶ垂直線の延長線上に立つということである(図9)。これを基本として、GKのボールを処理している身体の方角によって調整する。つまりGKの身体の方角に合わせて、その方向にポジションを修正するのである(図10)。なぜならGKのクリアやファブルは、身体の方角の方向にある程度方向性は限定されるからである。これを「予測エリア」²⁾という。予測エリア内にポジションをとっておけば、クリアボールを拾える可能性は高くなる。クリアを拾うポジションは、相手の2次攻撃を未然に防ぎ、反撃に移るための重要なポジションにもかかわらず、見落とされがちである。そのためGKはこうしたポジションをとるようDFと事前の打ち合わせをしておく必要がある。

b) ゴールをカバーすること

ゴールをカバーすることは、GKの処理ポイントよりゴールライン側のDFの役割である(図11)。特にGKのボール処理に直接関するような役割がない、もしくは自分のマークすべき相手を持っていないプレーヤーが、ポジションを修正してゴールをカバーする。GKのプレーのガードやカバーするプレーと異なり、ポジションはゴールラインからそれほど離れない。

2.3. 守備範囲の分担方法

DFとGKの守備範囲を明確に区分することは不可能である。守備範囲は状況によって変化する上、重なりあう部分も多いからである(図12)。そのため、ゲーム中スムーズに守備範囲の分担を行い、プレーを成功させることは容易なことではない。実際、味方同志でクロスボールを競り合ったり、逆に譲り合ったりしてしまうことは、ゲーム中しばしば見受けられるプレーである。こうしたプレーを可能な限り回避するために、あらかじめDFとGK、指導者の間で守備範囲の分担について確認しておくことは重要である。これによりミスが生じた場合、原因や修正点を明確にすることが容易になる。

DFとの守備範囲の分担方法については、今まで述べてきたサポートエリアやDFの位置によるGKのポジションの変化、DFの役割の原則などを前提として、さらに考慮すべき問題や条件が幾つかある。以下、分担を行うために確認すべき諸問題や条件について概説していく。

(1) GKの能力

クロスボールに対するGK自身の守備範囲が狭い状況であれば、DFが処理しなければならない範囲は増大する。そのためGKの守備範囲については正確に把握しておく必

要があるが、フリーな状況でクロスボールを処理する場合と、他のプレーヤーが存在する場合の守備範囲は著しく異なることに注意する。実際のゲームでの物理的、精神的プレッシャーは守備範囲を狭くしてしまうものである。

(2) DFの能力

クロスボールに対するDFの処理が確実であれば、GKが処理しなければならない範囲は、縮小されるであろう。GKはより確実に守備ができる範囲でのプレーが可能になる。DFの範囲とGKの範囲が重なる部分は、条件を明確にし、確実に処理できるプレーヤーの範囲とすべきである。いずれにしてもGKとDFの能力の相対的な関係によって守備範囲は決定される。

(3) クロスボールのパターン

攻撃側のクロスボールのパターンを把握することによって、クロスボールの質を先取りすることができれば、守備範囲の混乱は少なくなるであろう。例えば、低いスピードボールが多ければDFが処理すべき範囲は増大し、逆に高く浮いたボールであればGKの処理範囲は増大するであろう。よって対戦チームのクロスボールのスピード、コース、高さなどの傾向を正確に把握しておく必要がある。

(4) 環境（風）

風向きによっては守備範囲の修正を必要とする。また風によるボールのコースの変化は、DFとGKの守備範囲の分担を混乱させる。例えば、DFが処理すべきボールが、強風によりコースを変え、急激にGKの守備範囲に入ってくる場合もある(図13)。こうした場合、ボール処理の役割分担をボールコースの変化に合わせて素早く行わなければならない。その際重要なことは、GK自身の意思表示である。DFはコースの変化につられて、そのままボールを追ってしまうことが多い。明確な意思表示がなければボールを追っているDFと交錯する危険性は充分ある。こうした場合、状況を把握できるGKがイニシアチブをとってプレーすべきであろう。ボールの変化につられてしまっているDFに状況を把握する余裕はないからである。

(5) アタッカーの能力

アタッカーの能力（特にヘディング）が高いと思われる場合、GKの能力と比較して十分に対抗できるようであれば、守備範囲を広くする。逆にアタッカーに競り負けるような状況であれば、DFの守備範囲を広くとり、GKはゴールにとどまることに比重を置くようにする。アタッカー、DF、ゴールGKの相対的な能力関係を把握することが重要である。

以上、守備範囲を分担するための主な問題や条件について検討してきたが、実際のゲームでは、今まであげた問題に限らず、様々な要素が絡み合って複雑な状況をつくりだしている。

2.4. DFに対するコーチングの方法

GKとDFの間で指示を出し合うことや、意思表示をすることはクロスボールを確実に処理するために欠かせない。特にGKからDFに対するコーチングは、GKがゴール前の状況を広範囲に渡って観察できるポジションにいること、さらにDFは自分のプレーに集中せざるをえず、周りの状況を把握することができないことなどから非常に重要である。そのためGKはゲーム中、特に守備組織における命令系統のトップにおかれるべきであり、GKからの的確なコーチングは、守備組織を安定させるために不可欠かつ絶対的なものにされるべきである。すなわちGKからの指示は全てが決定事項でなければならない。逆にGKからDFへという命令系統が不明確な場合、守備組織は容易に混乱する。例えば、ゴール前にあげられたクロスボールに対してDFから「GK!」という声がかかることがある。GKに出る意思がない場合、「GK!」という声で他のDFもボールをGKに任せてしまうばかりか、GKもゴールにとどまることになり、守備側のプレーヤーが誰もボールに対してプレーしようとしないうという状況が生じる。このように命令系統の不徹底は、守備の混乱を招く。そのため、特にプレーの決定事項に関しては、GKからDFにという命令伝達の流れを徹底すべきなのである。加藤³⁾は、GKが行うコーチングを「情報提供」、「決断」、「激励」に分類している。またアベリア¹⁾は、「合図」、「指示」、「情報伝達」、「志気高揚」の4種類に分類している。ここでは、クロスボールに対するコーチングについて、戦術的な重要性が高いと考えられる情報提供(指示、情報伝達)、決断(指示、合図)に焦点を絞り、ゲームの状況に合わせたコーチングの方法を検討することによって、指示を出す目的、指示を出すタイミング、指示の内容、具体的な指示の方法という4項目について検討する。

(1) 情報提供のコーチング

a) 指示を出す目的

情報提供のコーチングはDFに対して、ゴール前では相手プレーヤーのポジションや動き、危険なスペースの存在などを知らせ、ポジションの修正やマークの確認といったプレーを行うために用いられる。またクロスボールが上げられる直前のボール周辺においては、ボールに対峙しているプレーヤーとカバーしているプレーヤーの関係を知らせ、ボールにチャレンジするタイミングをよいものにするために用いられる。すなわち情報提供のためのコーチングは、クロスボールに対する守備組織を整えるために行われるものである。

b) 指示を出すタイミング

相手のクロスボールに対する情報提供のコーチングにおいて、GKがDFに対して指示を出すタイミングは、ボールがまだサイドでプレーされている場合やアウトオブプレー時、すなわちまだ相手がクロスをあげられない状況でできる限り早い段階で行われることが望ましい。例えば、相手がボールを持った状態をDFが的確にチェックしている場合、またはドリブルや壁パスなどの突破のプレー中でクロスを上げるまで

に時間がある場合などである。なぜならGKからのコーチングを受けて、DFがプレー行動を起こすまでに時間が必要だからである。クロスが上げられる直前のタイミングでは、GK自身もボールに集中しなければならず、状況を観察し、適切な指示を送ることは困難になる。DFが指示を受けて、プレー行動に移るまでの過程は、GKによる状況の観察から始まる。観察により状況を把握したGKは、相手プレーヤーが何を狙っているかというプレーの先取りを行う。それに基づいて、DFに何を知らせたらよいか判断し、実際にコーチングを行う。指示を聞いたDFは、指示の内容を理解し、他のプレーヤーに伝達し、どのようにプレーしたらよいか判断する。そして実際のゲームの状況に合わせてプレー行動を行うのである(図14)。これは複数のプレーヤーにまたがる過程であるため時間が必要である。よってクロスボールが上げられてから、マークの確認やポジションの修正をしようとしても難しい。それらはクロスボールが上げられる以前に準備されていなければ、時間的に不可能なのである。

c) 指示の内容

指示の内容は、主にボール周辺の状況に関するものとゴール前の状況に関するものに大別できる。いずれの場合も守備組織を整え、クロスボールの対処を有利にする内容でなければならない。ここではそれぞれの状況で指示の内容を決定する主要なポイントを上げておく。

〈ボール周辺の状況に関する指示の内容〉

- ・ボールに対峙しているプレーヤーのコントロール
(ワンサイドカット, ディレイ, タックルのタイミングなど)
- ・カバーリングプレーヤーのポジショニング (リカバーの方法, マークの確認)
- ・ボールを奪った後の処理 (クリア, パス)
- ・突破された後の対処 (リカバー)

〈ゴール前の状況に関する指示の内容〉

- ・マークの確認
- ・危険なスペースの確認
- ・リカバーさせるプレーヤーと位置
- ・ポジショニングの修正
- ・相手プレーヤーの動き
- ・クロスボールが上げられる直前の役割分担 (ニアサイド, フォアサイド)

これらの情報について、全てを指示することは時間的に不可能であり、またDFのプレー行動は、複数の目的に基づいて行われることは少ない。状況に応じて一つの目的を達成するために行われることが一般的である。そのため状況ごとに何が最も重要かを判断し、指示していかなければならない。瀧井⁵⁾は、サッカーの状況判断に必要な情報として人、スペース、ボールについての情報をあげている。そしてプレーヤー

は、“グッド・ポジション”をとるために全ての情報を常に均等にとりいれて把握するのではなく、必要に応じたバランスでとりこんでいることも指摘している。つまりGKにとって情報提供の責任は、全ての情報を提供するというのではなく、ある状況において最も必要かつ重要とされる情報を選択、判断し、正確に素早くDFに伝え、適切なプレー行動を起こさせることにあるといえよう。

d) 具体的な指示の方法

ヒューズ²⁾がいう「明確な指示」、「簡潔な指示」、「冷静さ」という指示の注意点は、物理的、精神的プレッシャーがかかった状態のゴール前のDFにとって、長い指示を聞き取り、プレー行動に移すことは困難であるということを前提としている。なぜならDFが注意しなければならないことは、ボールと自分がマークする相手やスペースであり、しかもそれらの状況は、瞬間的に変化しつづけるからである。こうしたプレッシャーを絶えず受けているDFに対して有効な指示を送る原則は、「可能な限り短い言葉で最も重要な情報を表現し、伝達せよ」ということである。

ここでクロスボールに対する情報提供の指示の具体例についてまとめておく(表1)。

(2) 決断のコーチング

a) 指示を出す目的

決断のコーチングは、GKのクロスボールに対する意思表示を明確にする。しかし決断のための時間がわずかなことや、一度決断し指示をしたら修正が困難なことなど、情報提供のコーチングに比較して困難な要因は多い。そのためゲーム中の守備の混乱は、GKからの決断のコーチングが的確に行われなかったことが原因である場合が多い。

クロスボールに対するGK自身のプレーは、大別して2通りである。すなわち直接ボールを処理に出るか、もしくはゴールにとどまりDFに処理させるかである。クロスボールに対してGKがどちらのプレーを行うか決断し、指示を出すことによって意思表示をすれば、状況ごとの役割分担が明確になる。例えば、GKが直接ボールを取りに出ることを決断し、意思表示をしてプレーに入れば、他のDFの役割はGKのためにコースをあける、ガードする、カバーするなどになる。役割が重なることがなければ、それだけ守備組織の混乱は少なくなり、守備が成功する可能性は高くなる。逆にGKからの意思表示、指示がなければ、状況に応じた役割分担を行うことは困難になる。こうした場合、GKとDFの役割が交錯し易くなり、味方同志で競り合ってしまったたり、ボールの処理を見合ってしまったりする事態が生じる。一度このようなプレーが発生すると、GK、DFそれぞれに精神的な不安や不信感を持つてしまうことが多い。そのため混乱した守備組織をゲーム中に立て直すことは、容易なことではない。よって決断のコーチングは、GKがプレーの意思表示をすることによって、クロスボールに対する役割分担を行い、ボールを確実に処理するために行われるものである。

b) 指示を出すタイミング

決断のコーチングの場合、指示を出すタイミングが遅れると致命的なミスにつながる。そのため指示のタイミングは重要である。クロスが上げられた場合、GKが直接ボールを処理するか、またはDFに処理させるという2つのプレーの選択肢があるが、いずれにおいても指示を出すタイミングは、クロスボールを上げられてからDFがボールに対してのプレー行動を起こすまでの間ということになる。理想は、クロスが上げられた瞬間にGKがボールのコースを見極め、指示を出すことである。このタイミングであれば、DFがプレー行動に移るまでの時間的な余裕はあると考えられる。しかしボールの質にもよるが、クロスボールが出された地点と目標地点との中間点をボールが通過する以前に判断しなければ、状況に対応することは困難になると考えられる(図15)。ボールが目標点に近づき、DFがプレーに入ってから指示をしても、プレーを変更できずGKと交錯してしまうであろう。

c) 指示の内容

指示の内容についても、クロスボールに対してGK自身が直接ボールを処理する場合とDFに処理させる場合の2通りの状況で考えられる。いずれの場合もGKが明確に意思表示をし、守備組織を素早く役割分担し、確実に処理を行うことができる指示の内容でなければならない。ここでは、指示の内容を決定する主要なポイントをあげておく。

〈GKが直接ボールを処理する場合の指示の内容〉

- ・ 処理に出るという意思表示
- ・ アプローチのコースの確保
- ・ 他プレーヤーの役割の明確化

〈DFにボールを処理させる場合の指示の内容〉

- ・ ゴールにとどまるという意思表示
- ・ ボールを処理するプレーヤーの周りの状況
- ・ 誰がクリアするか
- ・ どこへクリアするか

d) 具体的な指示の方法

情報提供のコーチングと同様、指示を送る原則は、「可能な限り短い言葉で最も重要な情報を表現し、伝達せよ」ということに変わりはない。しかし情報提供のコーチングと異なり、決断のコーチングは、その指示がプレーに決定的な影響を与える。またクロスが上げられてからの指示であるため、指示のタイミングが遅れ、誤った指示をしてしまった場合、守備組織に混乱を招く。

ここでクロスボールに対する決断の指示の内容とそれに対応する具体例について、GKがボールを処理する場合とDFが処理する場合に分類しまとめた(表2)。

3. まとめ

クロスボールに対する守備においてゴールGKとDFの有機的な関連は重要であるにもかかわらず、取り上げられた文献は少ない。また指導においても個々の技術向上に焦点が絞られ、集団としての対処の方法を扱うトレーニングは行われることは稀である。そこで本稿では、クロスボール処理におけるゴールGKとDFの関係について4つの観点(サポートエリア、DFの役割、守備範囲の分担、コーチング)から戦術構造を明確にし、指導において何をトレーニングすべきなのかという問題点を把握できるようにした。その結果以下の点が明確になった。

- 1) サポートエリアを守備側のアドバンテージスペースにしておくこと
- 2) ボールの位置がゴールラインに近づくほどサポートエリアは小さくなるが、GKとDFの役割分担は不明確になりやすいため明確なコーチングが必要になる
- 3) DFの役割はGKの処理ポイントから近いプレーヤーにおいて、アプローチのルートをあける、GKのガード、GKのカバーリングという3つの役割がある。また処理ポイントから遠いプレーヤーにおいては、クリアボールを拾う、ゴールをカバーするという2つの役割がある
- 4) 守備範囲の分担で考慮すべき点は、プレーヤーの能力、クロスボールのパターン、環境である
- 5) 情報提供のコーチングは、守備組織を整えるために行われる
- 6) 決断のコーチングはボールに対する役割分担を明確にするために行われるが、プレーに決定的な影響を与えるため特に重要である

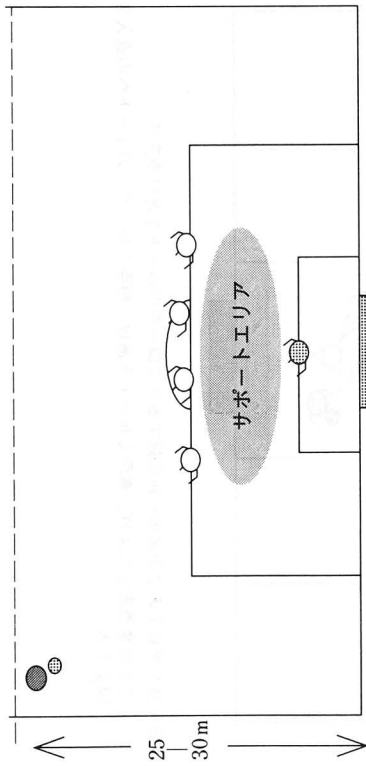


図1 ボールの位置がゴールラインから25~30mでタッチライン際にある場合のGKのサポートエリア

- ・DFの位置：ペナルティエリアのライン上
- ・GKの位置：ゴールエリアのライン上

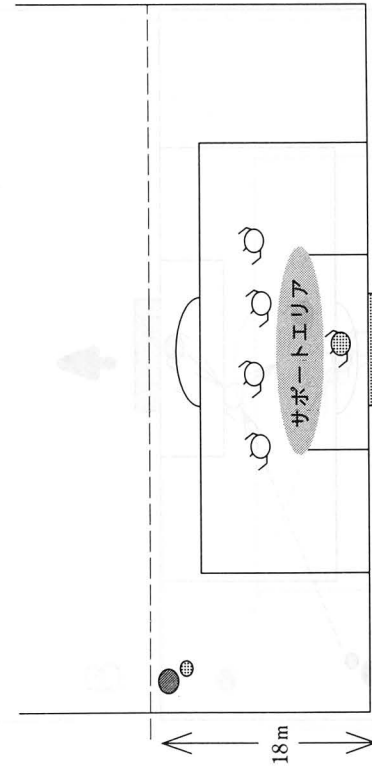


図2 ボールの位置がゴールラインから18m程度でタッチライン際にある場合のGKのサポートエリア

- ・DFの位置：ペナルティエリアの延長線上
- ・GKの位置：ゴールラインから3m程度離れている

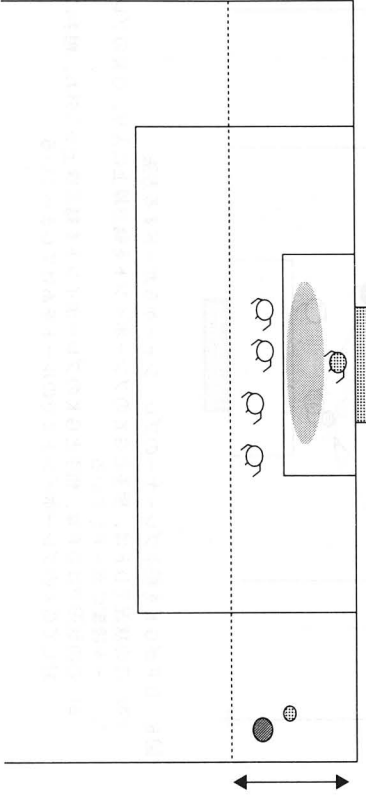


図3 ボールの位置がゴールラインから7~8m程度でタッチライン際にある場合のGKのサポートエリア

- ・DFの位置：ゴールエリアの線上
- ・GKの位置：ゴールラインから1m程度離れている

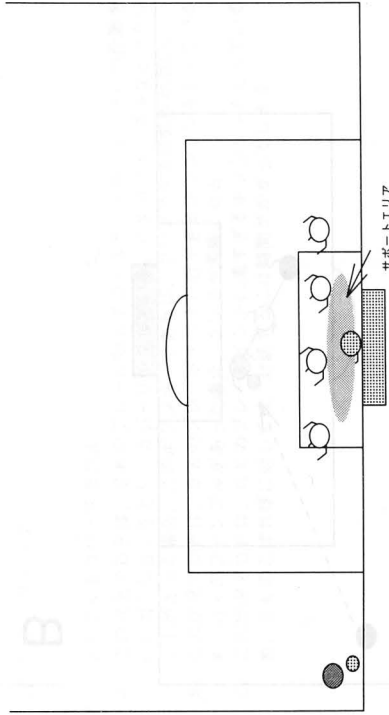


図4 ボールの位置がコーナー付近にある場合のGKのサポートエリア

- ・DFの位置：ゴールラインとゴールエリアラインの間
- ・GKの位置：ゴールラインから0~1m程度

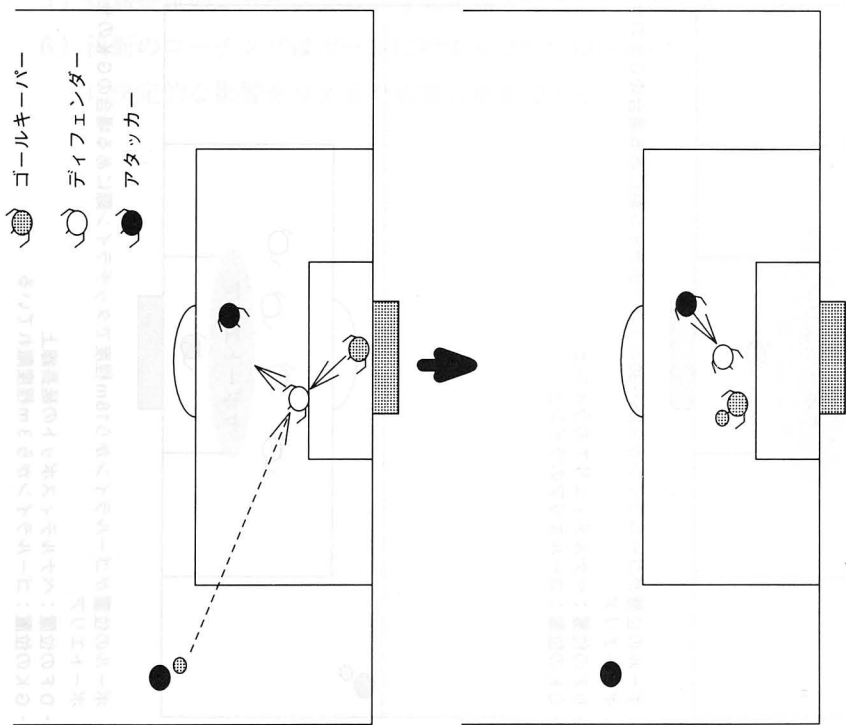


図5 D FがG Kのクロスボールに対するアプローチャのルートをあける方法
 ・G Kの意思表示により、素早くルートをあけ、相手プレーヤーのルートへの進入を阻止する

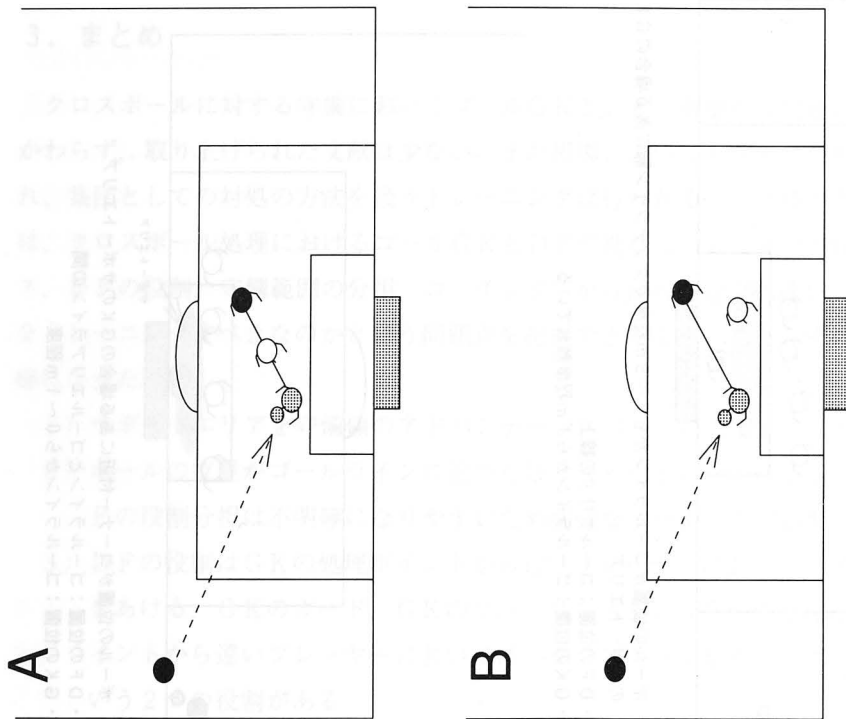


図6 D FがG Kを相手プレーヤーのプレッシャーからガードする方法
 (A) この状況でD Fは、相手とG Kのプレーポイントを結ぶ線に入り、G Kのプレーを確実にガードしている
 (B) この状況ではD Fは、相手とG Kのプレーポイントを結ぶ線から外れ、相手に対してG Kのプレーポイントまでのルートをあけてしまっている

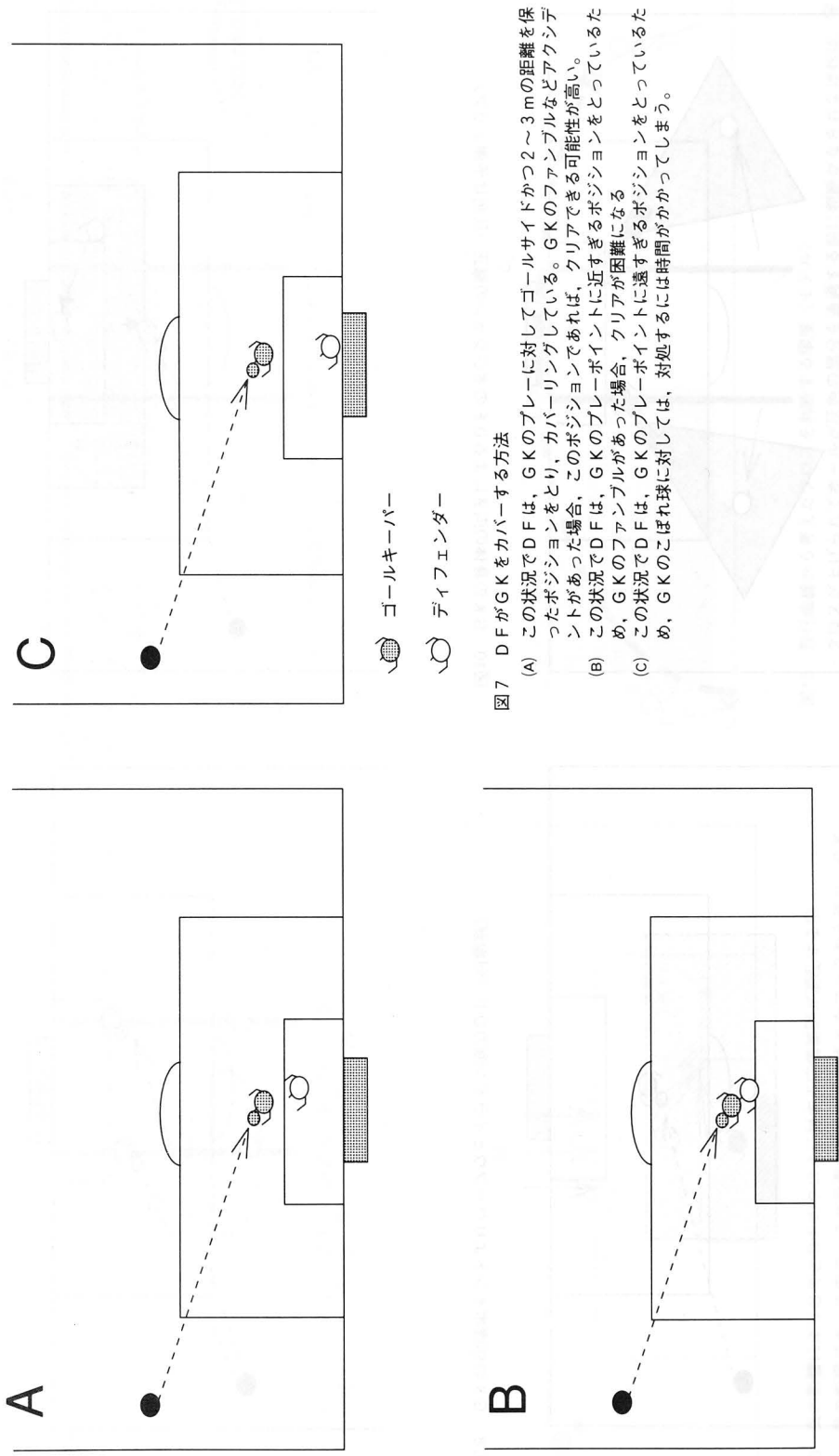


図7 D FがG Kをカバーする方法

- (A) この状況でD Fは、G Kのプレーに対してゴールサイドかつ2～3 mの距離を保ったポジションをとり、カバーリングしている。G Kのファンブルなどアクシデントがあった場合、このポジションであれば、クリアできる可能性が高い。
- (B) この状況でD Fは、G Kのプレーポイントに近すぎないポジションをとっているため、G Kのファンブルがあった場合、クリアが困難になる。
- (C) この状況でD Fは、G Kのプレーポイントに遠すぎないポジションをとっているため、G Kのこぼれ球に対しては、対処するには時間がかかってしまう。

ゴールキーパー

ディフェンダー

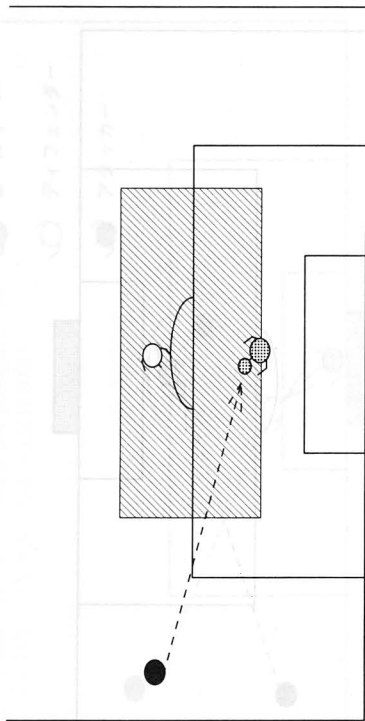


図8 GKの処理ポイントよりハーフウェイライン側のDF (斜線部)

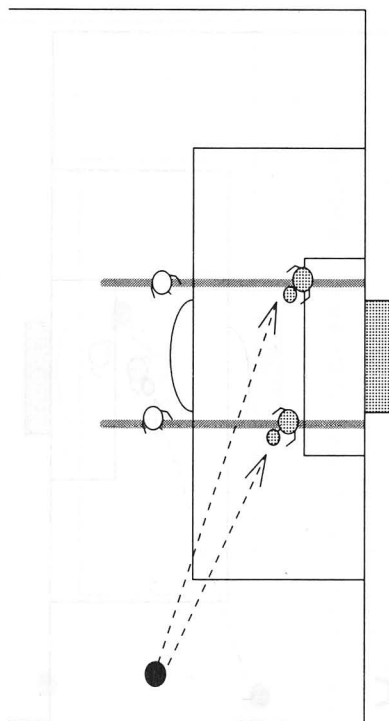


図9 GKの処理ポイントとゴールラインを結ぶ、垂直線の延長線上のポジション

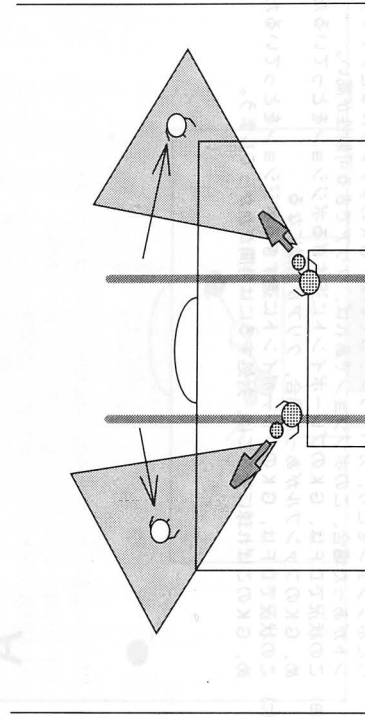


図10 GKの身体向きによるDFのポジションの修正 (灰色は予測エリア)

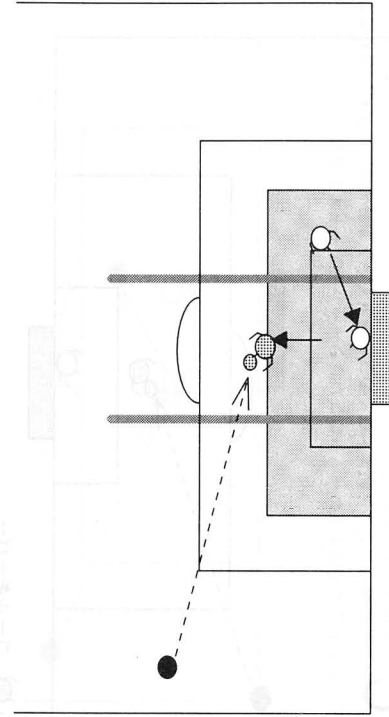


図11 GKの処理ポイントよりゴールライン側のDF (斜線部) がゴールをカバーするプレー

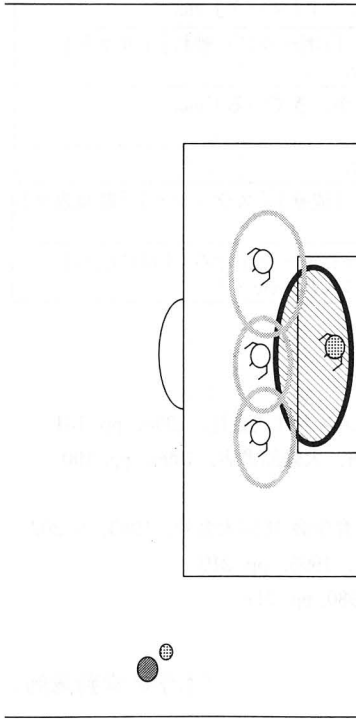


図12 GKとDFのクロスに対する守備範囲の重なる部分の例

- ・斜線部はGKの守備範囲、灰色線はDFの守備範囲

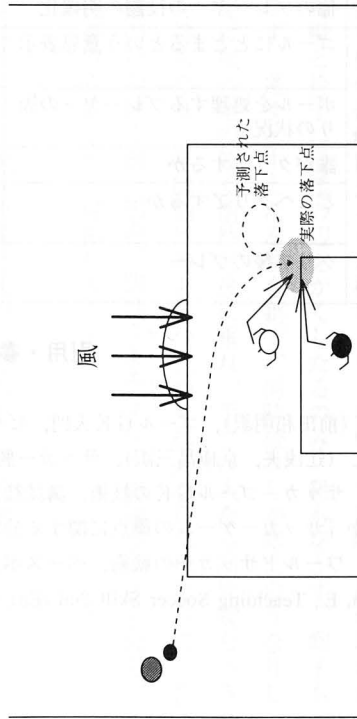


図13 風の影響によりGKとDFのクロスに対する守備範囲が混乱する例

- ・風の影響でボールのコースが急激に変化し予測されたコースから外れ、GKが処理すべき範囲に入った場合、DFとGKが両者ともボールを追うことが多く、交錯しやすくなる

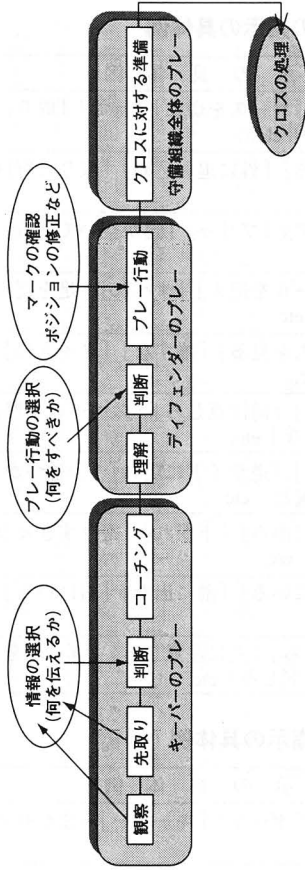


図14 GKからの情報提供のコーチングを受けてDFがプレー行動を起こすまでの過程

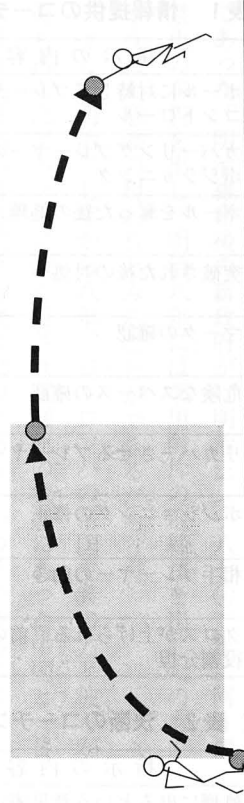


図15 飛行曲線から考えたクロスを判断する限度 (モデル)

- ・クロスが上げられてボールが灰色の部分を通過する前に判断がなされなければ、守備は混乱する可能性がある
- ・図中の●は、飛行曲線の間接点であるが、判断の限度点と捉える

表1 情報提供のコーチングにおける局面ごとの指示の具体例

局面	指示の内容	指示の具体例
ボール周辺	ボールに対峙してプレイヤーのコントロール	「上げさせるな」「コースを切れ」「待て」「取りに行け」「遅らせるな」 etc.
	カバーリングプレイヤーのポジショニング	「近づけ」「離れろ」「外に追い込め」「取りに行け」「待て」 etc.
	ボールを奪った後の処理	「つなげ」「クリア」「フリー」「逆が空いている」「右を見ろ」 etc.
	突破された後の対処	「中へ戻れ」「ボールを追い」「すべれ」「足をだせ」「コースに入れ」 etc.
ゴール前	マークの確認	「マーク確認」「人を見ろ」「離すな」「タイトに」「つかまえろ」 etc.
	危険なスペースの確認	「ニアがあいてる」「前注意しろ」「スペースを埋めろ」「寄りすぎるな」 etc.
	リカバーさせるプレイヤーと位置	「中盤引いてこい」「逆サイドに戻れ」「○番つかまえろ」「引け」「戻れ」 etc.
	ポジショニングの修正	「右に寄れ」「前に出ろ」「下がれ」「寄りすぎるな」「止まれ」「待て」 etc.
	相手プレイヤーの動き	「走った」「後ろにいる」「前に出た」「右にいる」「○番注意」 etc.
	クロスが上げられる直前の役割分担	「ニアサイドを見ろ」「人に注意しろ」「ゴールをカバーしろ」「ガードしろ」 etc.

表2 決断のコーチングにおける局面ごとに指示の具体例

局面	指示の内容	指示の具体例
キーパーがボールを処理する場合	処理に出ると意思表示	「オーケー」「マイボール」「キーパー」「まかせろ」 etc.
	アプローチのコースの確保	「どけ」「離れろ」「動くな」「待て」 etc.
	他のプレイヤーの役割の明確化	「カバー」「ブロック」「マーク」 etc.
ディフェンダーがボールを処理する場合	ゴールにとどまるという意思表示	「クリア」「競れ」「(ボールに)触れ」「カット」「ヘディング」 etc.
	ボールを処理するプレイヤーの周りの状況	「フリー」「(相手が)きている」 etc.
	誰がクリアするか	「名前を呼ぶ」 etc.
	どこへクリアするか	「外へ」「大きく」「流せ」「スラッシュ」「跳ね返せ」「逆へ」 etc.
	クリア後のプレー	「上がれ」「プレッシャーをかけろ」「前に出ろ」「待て」「コースに入れ」 etc.

引用・参考文献

- 1) Aberia, J. (前田和明訳), ゴールGK入門, ビクターエンタテインメント株式会社, 1996, pp. 131
- 2) Hughes, C. (辻浅夫, 京極昌三訳), サッカー勝利への技術・戦術, 大修館書店, 1996, pp. 190
- 3) 加藤好男, サッカーゴールGKの技術, 講談社, 1992, pp. 206
- 4) 松原裕ほか「サッカーゲームの得点に関する分析的研究」日本体育学会31回大会号, 1983, p. 202
- 5) 瀧井敏郎, ワールドサッカーの戦術, ベースボール・マガジン社, 1995, pp. 210
- 6) Wortington, E., Teaching Soccer Skill 2nd (Ed), Lequ: London, 1980, pp. 217

(本学非常勤講師)